

令和 3 年度 連携研究スキームによる研究（委託研究課題）
評価報告書

研 究 テ ー マ 名	ナッジ等を活用した気候変動への対応等環境政策の推進に関する研究
委 託 研 究 課 題 名	地域資源循環の構築に向けた農業者・消費者・市民の行動変容と政策措置に関するRCT分析ー濃縮有機液肥の技術改善がもたらす効果の検証を事例としてー
研 究 実 施 期 間	令和 2 年度～令和 4 年度
研 究 総 括 者	国立大学法人九州大学 大学院農学研究院 教授 矢部 光保
研 究 の 概 要	持続可能な地域資源の循環と活用に向け、バイオガスの製造過程で発生するメタン発酵消化液の利用拡大を事例として、これらに関する技術や情報が、農業者と消費者および市民の意識と行動にいかなる変容をもたらすかについて、RCTを用いて明らかにし、政策形成のデザインと評価を行い、政策的含意を導出する。
評 価 結 果 ○ 評価委員会名及び開催日 「連携研究スキームによる研究」外部評価委員会 令和 4 年 3 月 3 日開催 ○ 評価委員名 立川雅司委員 （名古屋大学大学院環境学研究科教授） 淡路和則委員 （龍谷大学農学部食料農業システム学科教授） 若菜千穂委員 （NPO 法人いわて地域づくり支援センター常務理事） ○ 評価基準 ・ 社会的ニーズへの対応 S.非常に大きな意義がある A.大きな意義がある	【評価項目ごとの評価】 （ ）内は 3 名の委員の投票数を示す。 ○ 社会的ニーズへの対応 S:非常に大きな意義がある（1） A:大きな意義がある（2） ○ 政策研究と連携して研究することによる政策研究への示唆の評価 S:非常に多くの示唆が見込める（1） A:多くの示唆が見込める（2） ○ 学術面からみた研究成果の評価 S:学術的に非常に高く評価できる（2） A:学術的に高く評価できる（1） ○ 研究計画の妥当性 S:非常によい（1） A:妥当である（2） ○ 研究資源・実施体制の妥当性 S:非常によい（2） A:妥当である（1） ○ 研究目標の達成度 A:達成度は高い（1） B:概ね達成している（2）

B.意義がある C.意義が小さい D.意義は見出しがたい ・政策研究と連携して研究する（した）ことによる政策研究への示唆の評価 S:非常に多くの示唆が見込める A:多くの示唆が見込める B:示唆が見込める C:示唆は少ない D:示唆は見込みがたい ・学術面からみた研究成果の評価 S:学術的に非常に高く評価できる A:学術的に高く評価できる B:学術的に評価できる C:学術的な評価はやや低い D:学術的評価は低い ・研究計画の妥当性 S.非常によい A.妥当である B.概ね妥当である C.やや妥当でない D.妥当ではない ・研究資源・実施体制の妥当性 S.非常に良い A.妥当である B.概ね妥当である C.やや妥当でない D.見直しが必要である ・研究目標の達成度 S.達成度は非常に高い A.達成度は高い B.概ね達成している C.達成度はやや低い D.達成度は低い	【総合評価】（ ）は3名の委員の投票数を示す。 1:順調に進行しており、問題ない（3） 【評価委員からの主な意見】 ○ 実際の栽培と販売、子供たちへのアピール等、とても実践的な研究で素晴らしいと思いました。生産者と消費者では、必要となる情報や言葉の表現が異なるので、その間に翻訳者の立場にいらっしゃるという役割もあるのかということも感じました。生産者と消費者がより直接的につながっていくことが、エコ的な取り組みにもつながると思いましたので、研究者の役割も今後高まっていくことを感じました。これからも進めていただければと思います。 ○ 有機液肥に関する長期的な研究成果を活かしつつ、RCTやナッジと結びつけて、社会導入を図る研究として高く評価したい。液肥製造の原料により消費者の受容性が異なるとのことだが、環境問題解決への寄与度に関する情報提供を行うことで改善できる可能性を検討することも可能ではないか。またナッジの手法間での消費者の反応の違いを検討することなども可能ではないか。 ○ 有機液肥については、濃縮しない消化液利用との比較があるとよい（とくに水田での流し込み施用との比較）。イチゴなどについては、栽培技術が稲作ほど平準化していないので、慣行栽培と有機液肥栽培の比較の際に「慣行栽培」の中身を明確にする必要がある。イチゴでは培地、養液成分と供給方法、さらにはハウス内環境など。食味比較で違いが出ているのは興味深い、それを説明する科学的根拠が求められる。そのためにも「慣行」の定義は厳格に行う必要がある。
---	--

・総合評価 1.順調に進行しており、問題ない 2.ほぼ順調であるが、改善の余地がある 3.計画等を変更する必要がある 4.中止すべきである	
今 後 の 対 応 方 針	● 環境問題解決への寄与度に関する情報提供を行うことで改善できる可能性を検討することも可能ではないか。 → 令和4年度の販売実験の情報提供の1つとして検討します。 ● ナッジの手法間での消費者の反応の違いを検討することなども可能ではないか。 → 令和4年度の販売実験において、ナッジの手法間での消費者の反応の違いが販売数に与える影響をみることを計画しています。 ● 有機液肥と濃縮しない消化液利用との比較についての可能性（とくに水田での流し込み施用との比較）。 → 小課題2の研究では液肥を利用した農作物の生産・提供を目的としており、液肥の性能や適切な利用法に関する情報は参考程度に捉えていただきたいと思います。後者の情報を得るためには、より大きな面積で、反復をとって実験を行う必要があります、現状では液肥の供給が追い付かず、実施は困難な状況にあります。そのため、指摘内容については、新たなプロジェクト研究の中で対応して行きたいと思います。 ● イチゴについては、栽培方法が稲作ほど平準化していないことを考慮する必要があるという点について → 栽培比較実験においては様々な条件を明記できるようにデータを取りながら進めているので、今後の報告などではより詳細に記載します。